平成 28 年度　事業報告書

(学生団体)福島大学災害ボランティアセンター

福島大学のマスコット　めばえちゃん

震災後、福島のみんなを元気づけるために活動する

森の木の妖精だよ。

はじめに

ゼネラルマネージャー　小島　望
（人間発達文化学類４年）

この度は本報告書をお手に取っていただき、ありがとうございます。活動のご報告に先立ちまして、今年度も多くの方々にご支援いただき、当団体が活動できましたことをこの場を借りて御礼申し上げます。

震災から６年を数え、新たなフェーズへの移ろいを強く感じたこの１年、私たちは今なお多様に存在するニーズに対して、学生にできることは何かを考えながら活動に邁進してまいりました。特に仮設住宅から復興公営住宅への移転が本格化した今年度は、活動のフィールドを広げるとともに、今まで以上に“地道な活動”を大切にすることを意識した１年間でありました。仮設住宅に住まわれる方が少なくなろうとも、活動の手を引いて付き合いを減らすのではなく、そこに住む方々一人ひとりに対してニーズに適った地道なお付き合いをすることが大切です。また、新たな生活拠点となった復興公営住宅では、仮設住宅から去られたことでつながりを断つのではなく、学生が居住者の仲介役となって復興公営住宅でのコミュニティをつないでいこうという思いがあり、避難指示解除が進みつつある現状と帰還地域においては、帰還後の生活コミュニティ形成を見通した「学生 DASH 村」という新事業にも力を入れて参りました。

こうした活動の成果は数値では表せないものがあると考えています。学生と住民が集う場所にはいつも和やかな、温かな空間が築かれ、かけがえのない笑顔が溢れる時間があります。「する」「される」の一方向ではない、「しあう」というお互いさまの双方関係が生まれており、このような関係を築いていくことができるのも、当団体が震災当初からかかわり続けた結果にあると感じております。今後続く復興に対して私たちが行っていくことは、一人の学生が一人の住民の方とお付き合いしていくこと、そのつながりを大切にしていくことではないかと考えております。

私事ではありますが、震災当初なにもわからぬまま、それでも「福島のために何かしたい」という思いで千葉県から福島大学への入学を決めてから、あっという間に４年間が過ぎ去りました。この 4 年で福島を取り巻く現状は大きく変わったと思っております。入学時から行い続けている活動もあれば、ニーズに応じて生まれた活動や大きな事業にも参加してきました。そのような継続的な活動の中で、個人でのお付き合いが増えたことが私の誇りであります。会えば私の名前を呼び、温かく迎えてくださる方々とのつながりは今後絶えることのないものだと思います。私は今年度を最後に大学を卒業し社会人となりますが、私が福島に来て、見て、感じたこと、行ってきたことを誰かに発信し続けることが復興への一助になることと信じて福島に関わり続けていきます。

今後も福島では多様なボランティアが必要となってくることでしょう。仮設住宅が解消されたら団体が終わる、ということではありません。新しい住まいでもニーズはあります。そこに現地の大学生が学生らしく、どのようにかかわっていけるかを考え、行動していくことが求められています。来年度入学してくるのは、震災当初小学生だった世代の子どもたちです。年々学生自身の震災への意識が希薄化していく中で、多くの学生を取り巻き、私たちにできることを本気で模索しなければなりません。私たちの活動ができなくなることで悲しむ人たちは誰なのか、私たちは日々何のために活動しているのか、どんなときも「活動の向こう側」を忘れないで今後も活動していきます。

本報告書は当団体がひたむきに福島と向き合い、どんな地道な活動でも、大きな事業でも、真剣に取り組んできた１年間の成果であります。ぜひお手にとっていただけると幸いです。

目 次

はじめに

1. 福島大学災害ボランティアセンターの各事業

① 津波・地震現場・原発災害・地区再編自治体での復興支援活動

1-1. 南相馬市小高区復興支援ボランティア

1-2. 新地町ビーチクリーニング(景観復興活動)

1-3. 南相馬市小高区学習支援フリースペース

1-4. 浪江町、大熊町、双葉町、富岡町での実況見分

1-5. 双葉８町村、飯舘村支援イベントの要請対応

② 仮設住宅・民間借り上げ自治会への協力、住宅交流活動、復興公営住宅のコミュニティ形成支援

2-1. 季節イベント

2-2. 福茶サロン

2-3. 富岡町さくらサロン

2-4. 健康体操サロン

2-5. 各地被災者自治会と地元自治会・地元組織との交流促進活動

＊浪江町仮設住宅・復興住宅居住者と地元安達地区の「絆祭り」等

2-6. 仮設住宅からの引っ越し作業のボランティア

2-7. 他大学・団体活動の現地調整活動

③ 仮設住宅拠点化生活支援活動

3-1. いるだけ支援

④ 帰還地域でのニーズ対応、コミュニティづくり活動

4-1. 学生 DASH 村

4-2. 楢葉町要請対応

⑤ 県外避難者・移転者との絆連携活動

5-1. 県外避難者支援拠点での活動

⑥ 健康づくり

6-1. 高齢者サポート拠点での健康づくり、介護予防サポート活動

＊飯舘村高齢者サポート拠点「あづまっぺ」での交流サロン(年 4 回)

⑦ 福島の風評被害軽減・産業振興サポート活動

7-1. 前橋芋煮会

⑧ 福島の子どもたちの健全な交友づくりサポート活動

8-1. 第 4 回 集まれ！ふくしま子ども大使

⑨ 福島元気発信活動

9-1. 天満音楽祭

9-2. 災ボラライブコンサート

9-3. 多摩プラザ

⑩ 子供の発達・遊び支援・子どもの力支援

10-1. ふくしま子どもネイチャリングキャンプ 2016

10-2. 福島の子どもたち日帰りリフレッシュプロジェクト

10-3. 浦和レッズハートフルサッカー

10-4. ホールアースとの活動

10-5.「キッズケアパークふくしま」の室内遊び

⑪ 復興のまちづくり活動

11-1.「福島　復興フェス 2016」

⑫ 災害に関する他団体・企業との共同活動

12-1. 繋ぐ～KYOTOHOKU～(京都学生祭典)

12-2. 炊き出し活動

12-3.「味の素」との料理教室

12-4.「アサヒホールディングス」の県外避難者文化活動への協力

⑬ 災害援助及びその活動に関する情報提供、啓発活動、報告活動

13-1. 各種研修会・講演会での発表

⑭ 災害復興のイベント企画

14-1.「スタ☆ふく」等による学生企画イベントへの協力

⑮ 福島大学が行う災害に関する各事業での協力

⑯　その他被災地・被災者のニーズに対応した活動や、センタースタッフ、登録者からの自発的提唱活動

16-1.　熊本地震のサポート活動

⑰　登録者のフォローアップ事業

17-1. ステップアップツアー2016

17-2. ボランティアウィーク 2016

17-3. サークルオリエンテーションへの参加及び新歓オリテの実施

17-4. 災害ボランティアセンターバレーボール大会及び芋煮会

⑱　広報活動

18-1. ホームページの運営管理

18-2. Facebook、Twitter を活用した情報発信

18-3. 学内掲示コーナーの充実

18-4. リーフレット作成

2. **これまでの活動一覧**

3. **メディア掲載履歴**

4. **寄付者一覧**

おわりに

①津波・地震現場・原発災害・地区再編自治体での復興支援活動

1-1. 南相馬市小高区復興ボランティア

【概要】

福島県南相馬市小高区は東日本大震災によって、津波被害や建物等の倒壊による被害の他に、福島第一原発事故によって、小高区全域と原町区の一部が避難指示区域に指定され、非難を余儀なくされた。2016 年 7 月 12 日に帰還困難区域を除く、小高区全域と原町区の一部の避難指示解除がされ、帰還率が今年の 2 月時点で 12 パーセントと低いのが現状である。

この南相馬市小高区復興ボランティアは、住民の皆さんが帰還し生活ができるような環境を整えることを目的として行っている。福島大学災害ボランティアセンターでは 2013 年より、NPO 法人災害ボランティアネットが運営している「南相馬市ボランティア活動センター」にコーディネートをしていただく形で、南相馬市ボランティア活動センターに寄せられた様々なニーズに対して少しでも力になりたいとの思いで、福島大学からの参加者を募り現地でとコーディネートすることで活動を行ってきた。

【連携・協力】

「南相馬市ボランティア活動センター」

【活動場所】

南相馬市小高区

【活動日時・活動人数】

4 月 29 日(金) : 4 名
5 月 21 日(土) : 2 名
6 月 18 日(土) : 2 名
11 月 20 日（日）: 8 名

【内容】

民家の小屋の整理や放棄地になった場所の草刈り、竹の伐採

【参加者の声】　　片野　里香(行政政策学類 1 年)

私は、被災地の現状を知りたい、少しでも復興のお手伝いができたらという思いから、この活動に参加しました。実際に街並みを見てみると、震災から数年経った今でも被害の跡が多く見られ、まだまだ復興活動を続けていかなければならないと実感しました。また、この活動は体力を使うものだったため大変でしたが、住民の方やボランティア参加者との触れ

合いもあり、楽しみながら取り組むことができました。全体を通して、自分の視野を広げることができた充実した活動であったと思います。

【活動写真】

1-2. 新地町ビーチクリーニング(景観復興活動)

【概要】

この活動場所になっている福島県新地町は東日本大震災で甚大な被害を受けた地域である。町は太平洋に面していて、津波浸水面積は 9.27 ㎢（町面積 46.35 ㎢）という壊滅的被害となった。震災前は町の海水浴場として親しまれていた「釣師浜海岸」は、震災直後はガレキに覆われた海岸へとなってしまった。

そして震災から約 2 年後、現代表を務める川上さん夫妻を中心に「新地町ビーチクリーン隊」による海岸清掃活動が始動した。清掃活動の参加者は、町民の方だけではなく全国から沢山のボランティアの方が集まってくる。震災から 7 年が経つと護岸整備が着々と進む中での清掃活動になり、海岸も震災前の状態に戻りつつある。

このような光景の裏には継続されてきた海岸清掃の存在があり、活動に参加する学生に被災地の変化を感じ取るきっかけになってほしいと考えている。

【主催】

新地町ビーチクリーン隊

【活動場所】

福島県新地町釣師浜海岸、中磯浜海岸（主に釣師浜海岸）

【活動日時、参加者数】

第 1 回　4 月 24 日(日) ; 7 名
第 2 回　5 月 22 日(日) : 8 名
第 3 回　6 月 26 日(日) : 5 名
第 4 回　9 月 25 日(日) : 3 名
第 5 回　10 月 23 日(日) : 4 名
第 6 回　12 月 25 日(日) : 5 名
第 7 回　2 月 26 日(日) : 1 名
第 8 回　3 月 26 日(日) : 3 名

【活動内容】

海岸の清掃活動

【参加者の声】　　田村匠、西場慧(共生システム理工学類 1 年)

今日は午前中新地町釣師浜でビーチクリーンをしてきました。主な活動は砂浜でごみ拾い活動です。梅雨であるにもかかわらず空も海もきれいな青色で、想像していたよりもきれいな砂浜で、震災後多くの方々の努力の賜物だと感じました。

活動に参加されていた方々はとても明るく元気はつらつとしてて、今回初めて参加した私たちでも楽しく、すぐに打ち解けられました。

今回活動に参加してみて印象に残ったことは、「釣師浜は震災後瓦礫の山でこんなにきれいになるまで多くの方々の協力があったんです。今回その作業の一端に携われたこと、そしてこの事と景色を忘れないでほしいです」という言葉でした。

この言葉を忘れずにこれからも参加できるときには積極的に参加していきたいと思います。

【活動写真】

1-3. 南相馬市学習支援（フリースペース）

【概要】

震災から 6 年を経過した現在も南相馬市小高区の小中学生は仮設校舎で授業を受けている。特別教室は無く、校庭・体育館を借りて毎日の学校生活を送っているのが現状である。そこで、長期休業期間だけでも子どもたちが集まって自由に過ごせる場所としてフリースペースの場を設け、大学生との関わりを通して子どもたちの心身のリフレッシュ、勉強に対する意欲の向上になればと思い小高区小中学校児童生徒親の会が企画したイベント。災ボラも企画のサポートを行い、今年の冬の開催で 10 回目を迎えた。

【協力・共催】

小高区小・中学校児童生徒親の会

【場所】

南相馬市鹿島区万葉ふれあいセンター
南相馬市立小高小学校仮設校舎

【期間】

夏季休業　8 月 1 日(月)～8 月 7 日(日)　　計 7 日間
冬季休業　12 月 23 日(金)～12 月 27 日(火)　　計 5 日間

【内容】　子どもたちの学習・遊び支援

夏季　夏祭り・スイカ割り(8 月 7 日)
冬季　クリスマス会・お菓子作り(12 月 24 日)
　　実験教室(12 月 25 日・26 日)
　　餅つき(12 月 27 日)

【活動人数】

夏季　福島大学 5 名、明治大学 12 名、京都女子大学 2 名、京都薬科大学 1 名、埼玉医科大学 1 名、大学院生・社会人など 14 名　　計 35 名
冬季　福島大学 6 名、明治大学 8 名、京都女子大学 3 名、京都薬科大学 1 名、埼玉医科大学 1 名、立命館大学 1 名、大学院生・社会人など 9 名　　計 29 名

【参加者の声】　佐々木　翔太郎(経済経営学類 2 年)

私は今年度の夏に初めてフリースペースに参加しました。正直に言うと、私はあまり子供と一緒に何かをするのがあまり得意ではありませんでした。そのせいか、最初は子どもたち

と上手く関わることが出来ず、もったいない時間を過ごしていました。それでも複数の日程で参加できたこともあって、次第に子どもたちと打ち解けることが出来るようになり、楽しい時間を過ごすことが出来ました。自分が子どもたちから元気をもらい、帰り際には子どもたちから「明日も来てね！」といった声を聞くことができて、とても嬉しくなりました。また、この活動では福島大学以外の方とも交流ができて、学生・社会人それぞれの震災に対する思い・子どもたちへの思いを聞くことが出来て、自分にとってはとても魅力のある活動に感じています。

冬のフリースペースにも参加し、夏に会った子どもたちと再会することが出来た時本当に嬉しかったことを覚えています。子どもたちが自分の名前を呼んでくれて一緒に何かしようと言ってくれるだけで嬉しくなりました。クリスマス会や餅つきといったイベントも子どもたちに楽しんでもらうことを大事にしました。準備する中で不安もありましたが、子どもたちの楽しんでいる姿を見て、ホッとしたことを覚えています。

子どもたちとの関わりが深くなると自然と子どもたちの様子が気になっている自分がいます。だから、年 2 回のフリースペースで成長した子どもたちの姿を見るのが自分の楽しみになっています。来年度もまた、南相馬へ足を運ぼうと思います。

【活動写真】

②仮設住宅・民間借り上げ自治会への協力、住宅交流活動、復興公営住宅のコミュニティ形成支援

【概要】

震災から6年が経過して、浪江町、富岡町、飯舘村の一部地域の避難指示が解除された。福島大学災害ボランティアセンターでは、1年目はコミュニティ形成の支援、2年目は自治会の自立の支援を主な活動理念としてきた。3年目は、今までの理念を継承しつつ、支援を行ったりすることでより住民の方と学生との交流を深めていくことを行った。4、5年目になると仮設住宅に住まわれている住民の減少により、更に高齢化と孤独化が進み、コミュニティの減少が顕在化した。そのため、継続的かつ住民の方のニーズに真摯に耳を傾けることを重視した。6年目では、復興住宅等への移転が本格的になり、住民の方の数が減少したため、自治会を廃止する仮設住宅が相次いでいる。そのためイベントの減少、仮設住宅でのコミュニティの減少が甚だしい。一方で、復興公営住宅では様々な市町村、仮設住宅、借り上げ住宅等から住民の方が引っ越してくるため、新たなコミュニティづくりが早急に求められるようになった。また、復興公営住宅へ引っ越した際、引っ越す前のコミュニティを懐かしみ、引っ越し後の顔見知りが少ない環境に寂しさを感じる声も聞こえるようになった。そそんな中、住民の方と楽しい時間を過ごし、仮設住宅でも復興公営住宅でも福島大学災害ボランティアセンターは変わらず寄り添い続けていくという姿勢で活動してきた。

季節に合わせた季節イベントや、住民の方との会話を大事にする傾聴ボランティアである足湯から派生した福茶サロン、健康体操サロンの「JOYBEAT」を行ってきた。また高齢者等の訪問活動である「井戸端訪問」や被災住民の方々が主体となった活動(教室等)への参加等、住民の方のニーズに対応して活動している。

2-1. 季節イベント

【概要】

福島大学災害ボランティアセンターでは、四季折々に合わせた季節イベントを自治会と協力して開催している。仮設住宅、近刊借り上げ自治会の自治活動を促進、復興公営住宅等への移転が本格的に進む中でのコミュニティ喪失を防ぐために行っており、また単調な生活への刺激という意味でも住民たちからも喜ばれている。

【内容】

春季	・お花見会
夏季	・夏祭り　・夕涼み　・BBQ
秋季	・芋煮会
冬季	・クリスマス　・望年会　・新年会、もちつき大会
随時	・親睦会、交流会　・お食事会　・運動会

【活動日時・活動場所・活動人数】

春季

・4 月 23 日(土)：上野台仮設住宅：6 名：お花見会[福笑い、カラオケ]

夏季

・7 月 2 日(土)：上野台仮設住宅：7 名：涼もう回[サラダうどん作り、カラオケ、七夕づくり]

・8 月 6 日(土)：安達運動場仮設住宅：5 名：留学生交流会

・8 月 28 日(日)：杉内仮設住宅：9 名：夏祭り[カラオケ、料理振る舞い]

・9 月 3 日(土)：南矢野目仮設住宅：6 名：流しそうめん、ビンゴ大会

秋季

・10 月 2 日(日)：旧松川小跡地仮設住宅：5 名：芋煮会

・10 月 8 日(土)：笹谷東部仮設住宅：10 名：芋煮会

・10 月 22 日(土)：上野台仮設住宅：8 名：芋煮会、塗り絵

・10 月 22 日(土)：杉内仮設住宅：12 名：芋煮会

・11 月 6 日(日)：飯野明治仮設住宅：24 名：芋煮会、ビンゴ大会

・11 月 26 日(土)：富岡さくらサロン：5 名：芋煮会

・12 月 4 日(日)：南矢野目仮設住宅：5 名：芋煮会、ビンゴ大会

冬季

・12 月 4 日(日)：松川第一・第二仮設住宅：9 名：クリスマス会[飾りづくり、ビンゴ大会]

・12 月 18 日(日)：杉内仮設住宅：6 名：望年会[鍋、クイズ大会]

・12 月 25 日(日)：旧松川小跡地仮設住宅：6 名：クリスマス会[もちつき、ビンゴ大会]

・12 月 25 日(日)：笹谷東部仮設住宅：6 名：クリスマス会[もちつき]

・1 月 11 日(水)：松川第一仮設住宅：8 名：新年会[カラオケ、レクリレーション]

・1 月 14 日(土)：上野台仮設住宅：6 名：新年会[福笑い、双六]

交流会・親睦会

・5 月 14 日(土)：富岡さくらサロン：10 名：親睦会[ビンゴ大会、旗揚げ]

・5 月 22 日(日)：旧松川小跡地仮設住宅：14 名：バーベキュー、ビンゴ大会

・6 月 25 日(土)：笹谷東部仮設住宅：10 名：バーベキュー、綿あめ配布

・8 月 20 日(土)：旧松川小跡地仮設住宅：4 名：バーベキュー、ビンゴ大会

・8 月 29 日(月)：藤田駅前仮設住宅：6 名：交流会[冷やし中華づくり]

・10 月 16 日(日)：飯坂復興公営住宅：13 名：1 周年記念祭[芋煮会、ステージ発表]

・11 月 29 日(火)：飯坂復興公営住宅：6 名： グラウンドゴルフ大会

【参加者の声】

〇阿部　弘輝(現代教養コース３年)

私の参加した夏祭りの当日は、気温が非常に高く、夏祭りを行うのに最高の晴天でした。当日は、焼きそば・焼き鳥・焼肉・ポップコーン・かき氷と本当に盛りだくさんの内容でした。更には、ビールを始めとしたドリンク類も充実しており、住民の皆さん、大学生と共に思い思いに食べたり、飲んだりと終始にぎやかなイベントとなりました。

私は、今年のこの夏祭りは特別のものになったのではないかと感じます。今年は、仮設住宅から公営住宅などへの移り住みが多くみられ、仮設住宅の空き家が更に多くなることが予想されます。そのため、今年仮設住宅で行われる季節のイベントが最後となる可能性が考えられるからです。当日、夏祭りに参加した住民の方からも、「おそらく今年が最後の夏祭りになるからね。」という声を耳にしました。今年の夏祭りには、例年以上に住民の方々が参加して下さりました。

この夏祭りのような季節のイベントは、１年の流れを感じることが出来、住民の方々と学生をより繋げてくれる大切なものです。これからは、こういった仮設住宅での季節のイベントが少なくなるかもしれませんが、この機会を少しでもこれから先も作っていくことが私たちに出来ることであり、求められていることと感じます。

〇菅野　はる菜(人間発達文化学類１年)

今日は南矢野目仮設住宅で流しそうめんを行いました。雨どいを使って流しそうめんを行ったほか、みんなでおにぎりを握ったり、かき氷や綿あめを食べました。私は初めて南矢野目仮設にお邪魔したのですが、住民の方々がフレンドリーに話しかけてくださりすぐに打ち解け、とても楽しく活動できました。流しそうめんもおにぎりもおいしいと言ってくださり嬉しかったです。これからは復興公営住宅に引越しされる方が多く仮設住宅に残る方は少なくなってしまいますが、今後も継続して住民の皆さんと活動していきたいと思っています。

【活動写真】

2-2. 福茶サロン

【概要】

昨年度に引き続き 2011 年 3 月の東日本大震災以降、継続して行ってきた足湯活動に加え、今年度はその活動の中でカラオケをしたり、季節に合わせた折り紙を作ったり、タブレット講習会をしたりなど、住民の方により楽しんでもらうサロン活動を目指して活動してきた。主に福島県内各地の仮設住宅、また、現在増えてきている復興公営住宅での活動を継続的に行っている。

今後も「福茶サロン」を通して、これまでの足湯活動よりも更に柔軟に住民の方のニーズに対応できるようなよりよい活動にしていきたい。

【協力】

浪江町社会福祉協議会、特定非営利活動法人「みんぷく」

【参加者の声】　　高坂　夏美(人間発達文化学類 1 年)

最初に足湯をしたときは、足湯の段取りがおぼつかなかったり、会話が止まってしまったりして満足して足湯をすることが出来なかったです。ですが、回を重ねる度に足湯

が目的ではなく、足湯という手段を通して、会話自体を楽しむことができるようになりました。また、今年度の後半からは足湯だけでなく、昔遊びなども取り入れてサロン形式に重点を置くようになったことで、これまで足湯を敬遠していた方も来てくれるようになるなど、うれしい変化がたくさんありました。今後も住民の方に寄り添って楽しい時間を過ごしていけたらいいなと思います。

【活動写真】

2-3. 富岡町さくらサロン

【概要】

富岡町から福島市へ避難して、福島市内の民間借り上げ仮設住宅に住んでいらっしゃる方々が平日の午前10時から午後4時まで集まることのできる場所が富岡町さくらサロンである。サロンに来られる方々と新緑会や芋煮会など季節のイベントや味の素料理教室を通して交流を行ってきた。

【活動日時】

5月14日(土)	新緑会	5月17日(火)	お料理教室
6月28日(火)	お料理教室	7月7日(木)	男の料理教室

9 月 12 日(月)	お料理教室	10 月 6 日(木)	お料理教室
11 月 1 日(火)	男の料理教室	11 月 26 日(土)	芋煮会
12 月 12 日(月)	お料理教室	2 月 13 日(月)	お料理教室
3 月 3 日(金)	お料理教室	3 月 10 日(金)	男の料理教室

【参加者の声】　　佐々木　翔太郎(経済経営学類 2 年)

さくらサロンでの活動は今年度から自分が積極的に関わるようになりました。新緑会や芋煮会といったイベントを行うことで学生と住民の方との関係を深められたように思います。お料理教室では住民の方からの指導も仰ぎつつ、楽しくお料理教室を行うことが出来ました。来年度は町の一部が避難指示解除となり、帰還される方もいらっしゃることと思います。福島市内に残られる方、帰還された方々それぞれに継続的な支援を続けること、長い目で物事をとらえることが求められると思います。

【活動写真】

5 月 14 日(土)　親睦会

5 月 17 日(火)　お料理教室

2-4. 健康体操サロン

【概要】

2014 年より株式会社エクシングにご協力いただいて、仮設住宅にて「JOYBEAT」というカラオケ体操プログラムを行っている。「JOYBEAT」とはテレビに映した映像と流れる音楽に合わせて、椅子に座ったまま体を動かすという内容である。目的は運動不足の解消はもちろん引きこもりの防止や住民同士、住民と学生の交流の場としての役割をもっている。

この活動は住民の方々のサークル活動の一環として定着している仮設住宅もあり、そこに学生がお邪魔しているという形になっていて住民が主体性を持っており、一方的な支援とは違った形がとれている。

【活動期間】

2014 年 11 月 29 日(土)～現在

【活動場所】

杉内仮設住宅、安達運動場仮設住宅、塩沢仮設住宅、石神第二仮設住宅、
笹谷東部仮設住宅、恵向仮設住宅、北幹線第一仮設住宅、南矢野目仮設住宅、
宮代第一仮設住宅、飯坂復興公営住宅

【協力】

・株式会社エクシング
・浪江町役場

【活動日時、活動人数】

4 月 20 日(水)石神第二仮設住宅：5 名
4 月 22 日(金)恵向仮設住宅：1 名
4 月 24 日(日)宮代第一仮設住宅：6 名
4 月 25 日(月)杉内多目的運動広場仮設住宅：1 名
4 月 26 日(火)岳下住民センター仮設住宅：2 名
4 月 27 日(水)安達運動場仮設住宅：3 名
4 月 27 日(水)塩沢仮設住宅：3 名
5 月 11 日(水)石神第二仮設住宅：2 名
5 月 15 日(日)宮代第一仮設住宅：4 名
5 月 23 日(月)杉内多目的運動広場仮設住宅：1 名
5 月 25 日(水)安達運動場仮設住宅：3 名
5 月 25 日(水)塩沢仮設住宅：3 名
5 月 26 日(木)笹谷東部仮設住宅：1 名

5月27日(金)恵向仮設住宅：1名
5月31日(火)岳下住民センター仮設住宅：2名
6月12日(日)宮代第一仮設住宅：2名
6月15日(水)塩沢仮設住宅：1名
6月18日(土)飯坂町復興公営住宅：4名
6月21日(火)岳下住民センター仮設住宅：3名
6月22日(水)石神第二仮設住宅：3名
6月24日(金)恵向仮設住宅：1名
6月27日(月)杉内多目的運動広場仮設住宅：2名
6月29日(水)安達運動場仮設住宅：2名
6月29日(水)塩沢仮設住宅：2名
7月6日(水)石神第二仮設住宅：2名
7月10日(日)宮代第一仮設住宅：2名
7月12日(火)岳下住民センター仮設住宅：1名
7月16日(土)飯坂町復興公営住宅：3名
7月20日(水)塩沢仮設住宅：2名
7月22日(金)恵向仮設住宅：2名
8月6日(土)飯坂町復興公営住宅：4名
8月20日(土)飯坂町復興公営住宅：1名
8月26日(金)恵向仮設住宅：1名
9月17日(土)飯坂町復興公営住宅：3名
9月21日(水)安達運動場仮設住宅：2名
9月23日(金)恵向仮設住宅：2名
9月26日(月)杉内多目的運動広場仮設住宅：2名
10月16日(日)宮代第一仮設住宅：1名
10月22日(土)飯坂町復興公営住宅：2名
10月28日(金)恵向仮設住宅：4名
11月6日(日)宮代第一仮設住宅：3名
11月19日(土)飯坂町復興公営住宅：2名
12月4日(日)宮代第一仮設住宅：2名
12月17日(土)飯坂町復興公営住宅：4名
1月15日(日)宮代第一仮設住宅：1名
2月5日(日)宮代第一仮設住宅：2名
2月18日(土)飯坂町復興公営住宅：2名
2月19日(日)宮代第一仮設住宅：1名
2月24日(金)恵向仮設住宅：2名

3 月 5 日(日)宮代第一仮設住宅：2 名
3 月 17 日(金)恵向仮設住宅：2 名
3 月 18 日(土)飯坂町復興公営住宅：4 名

【参加者の声】　　片瀬　俊一（経済経営学類 3 年）

この健康体操サロンの良いところは学生が何かしてあげるのではなく一緒に同じことするという形になっているところだと思う。少し難しい振り付けに住民も学生も苦戦しながら笑いあったり、昭和の歌謡曲を一緒に口ずさむ姿が見られたりと、とても微笑ましい。

また住民方々だけでも毎週継続的に行っている仮設住宅もあり、介護予防になるだけでなく、その時間そこに行けば誰かしらに会えるような空間を作ることができたことは大きな成果だと思う。

【活動写真】

③仮設住宅拠点化生活支援活動

3-1. いるだけ支援

【概要】

「いるだけ支援」とは、仮設住宅に居住しながら(近所付き合いをしながら)簡易な生活支援・声掛けをし、引きこもり防止に寄与する活動である。現在、仮設住宅から復興公営住宅、みなし仮設への転居、自力での住居再建、避難指示が解除された地域への帰還等により仮設住宅での空き家が増えている。仮設住宅に居住する人々は、もともと高齢者が多く、子ども・若者の声が消滅している日常があり、居住エリアの寂寞感が蔓延しているように感じるようになった。その中で、学生が仮設住宅に居住することで、見守りの目を増やし関連死・孤独死・自殺を防ぐとともに、仮設住宅を元気づけることが狙いである。また、北幹線第一仮設住宅、安達運動場仮設住宅を中心として近隣の仮設住宅や復興公営住宅へのアプローチも行っている。そして、住民が仮設住宅から別の環境に移られる中で、いるだけ支援のロッジングスタッフが中心となって、その後のコミュニティづくりにも寄与することを想起している。

【目的】

・各世代の対話場面や居場所をつなぎ「世代間交流」の亘りをつくる
・学生が生活の活力づくりに手を添えることによって、居住者本人が主人公、地域づくりの参画者となれるように居住者に働きかける
・孤独死を防ぐ。(身体的・精神的・社会的)健康増進に寄与し、介護予防・疾病予防、そして関連死を防ぐ
・学生が生活者の 1 人として、仮設住民と日常交流をすることで仮設住宅の静寂観を好転化させる
・仮設住民の生活のメリハリづくりを行う
・外部との人交流を促進させる
・簡易なニーズに応える

【場所】　北幹線第一応急仮設住宅、安達運動場応急仮設住宅(入居者は浪江町民)

【期間】

北幹線第一応急仮設住宅	2015 年 6 月 21 日(日)～現在
安達運動場住宅応急仮設住宅	2016 年 6 月 19 日(日)～現在

【ロッジングスタッフ】

◆北幹線第一応急仮設住宅

第Ⅳ期：3 月 11 日(金)～6 月 26 日(日)　　高橋航平(再登板)、佐々木翔太郎
第Ⅴ期：6 月 27 日(月)～10 月 31 日(月)　　久保香帆、藤井志穂
第Ⅵ期：11 月 1 日(火)～4 月 22 日(土)　　佐々木翔太郎(再登板)、高坂夏美
第Ⅶ期：4 月 23 日(日)～現在　　高橋航平(再々登板)、坂本奨

◆安達運動場応急仮設住宅
第Ⅰ期：6 月 19 日(日)～10 月 31 日(月)　　阿部弘輝、狗飼小花
第Ⅱ期：11 月 1 日(火)～3 月 8 日(水)　　佐藤しおり、久保野谷雅人
第Ⅲ期：3 月 9 日(木)～現在　　末永崇、阿部早也香

【イベントの活動日時、内容、参加者数】

※ロッジングスタッフからメーリングリストで参加募集をかけた活動

◆北幹線第一仮設住宅
6 月 26 日(日)：お祭り[綿あめ、焼きそば、ポップコーンの振る舞い]：15(2)名
8 月 12 日(金)：盆踊り[流しそうめん、浪江盆踊り]：14(2)名
9 月 4 日(日)：机づくり：4(2)名
12 月 30 日(金)：年越しそば打ち：4(2)名
12 月 31 日(土)：年越しそば振る舞い：4(2)名

◆安達運動場仮設住宅
7 月 30 日(土)：夏祭り[焼きそば、かき氷]：7(2)名
10 月 15 日(土)：秋のいるだけ大感謝祭[さんまの塩焼きや汁物振る舞い、竹キャンドル]：23(2)名
11 月 6 日(日)：芋煮会[芋煮、綿あめのふるまい]：7(2)名
12 月 23 日(金)：クリスマス大作戦：2(2)名
1 月 12 日(木)：もちつき[もちつき、カラオケ、昔遊び]：5(2)名
2 月 12 日(日)：足湯[足湯、おしゃべり]：3(2)名
2 月 26 日(日)：冬のいるだけ大感謝祭[ごはん、汁物のふるまい、思い出ムービー上映会、大抽選会など]：15(2)名

※(　　)内はロッジングスタッフ

【ロッジングスタッフの声】

○藤井　志穂(行政政策学類 2 年・北幹線第一仮設住宅第Ⅴ期ロッジングスタッフ)

これまでは足湯や健康体操、季節の活動等普段の活動を通してしか仮設住宅の住民の方々と接する機会はなかったのですが、いざ、実際に自分が仮設住宅で生活するようになり、普段の活動では見えなかった住民の方々それぞれの悩みや人柄などが見えてきました。また、次第に復興公営住宅に移られる方が増えていく中で、住民の方々が様々な思いを抱えていることを知りました。また、いるだけ支援の期間がこれまでの 3 ヶ月から 4 ヶ月へとの

びたことで、住民の方々とより濃いお付き合いができたような気がします。今後もこの関係を大切にしてお付き合いしていきたいと思います。

○高坂　夏美(人間発達文化学類 1 年・北幹線第一仮設住宅第Ⅵ期ロッジングスタッフ)

私が約半年のいるだけ支援を無事に終えることができたのは周りの住民の方と相方さんのおかげです。いるだけ支援を始めるときは不安で仕方がなかった私を孫のようにかわいがっていただき、温かく接してくださいました。ある住民の方には、「どっちが支援しているか分からない」と言われ、これはいるだけ支援を体現している言葉だと思いました。しかし実際は、いるだけ支援で仮設住宅での厳しい現実を目の当たりにすることもありました。けれども、このような貴重な経験を 1 年生の時にできたのは本当にありがたいと感じています。ここで学んだことをこれからの活動に生かしていきたいです。

○阿部　弘輝(現代教養コース・安達運動場仮設住宅第Ⅰ期ロッジングスタッフ)

私は、6 月から 10 月の期間に、安達運動場仮設住宅でいるだけ支援を行っていました。初めての一人暮らしということもあり、住民の皆さんには、大変お世話になりました。交代の際に、住民の皆さんに温かい言葉とかけていただいた時には、ほんの少しですが皆さんの力になれたのかなと感じることができました。復興公営住宅の完成に伴い、私が住んでいた時に比べると空き家が多くなってきています。そのため、外部から入ってくるイベントも少しずつ少なくなってきています。これからも、いるだけ支援を通じて得たつながりを大切にして皆さんとお付き合いをしていきたいと思います。

○佐藤　しおり(行政政策学類 4 年・安達運動場仮設住宅第Ⅱ期ロッジングスタッフ)

私が住んでいた時期はちょうど住み替えのピークで、80 軒近くが引っ越しをされました。その中で、仮設に残る方々の「寂しい」という声を多く聞きました。日に日に静寂さを増していく仮設住宅で、私たちがいることの意味を考えながらの 4 ヶ月でした。道端での立ち話や毎朝のラジオ体操、時には雪かきなどの些細な事ではありましたが、「近所づきあい」「人づきあい」ができたと思います。

【活動写真】

④帰還地域でのニーズ対応、コミュニティづくり活動

4-1. 学生 DASH 村

【概要】

田村市都路地区では、「東日本大震災」の原発事故の影響を受け、避難を余儀なくされた。その後平成 26 年度 4 月に避難指示が解除され、地区への帰還が実現したが、平成 28 年度現在で約 70%の帰還率となっています。帰還後は、人口の減少と相まって、地区の高齢化も進んでいる。その中で元気に暮らす高齢者とともに、コミュニティの賑わいだけでも取り戻したいとの声にこたえていくことを目的としている。ふるさとに戻り年を重ねた都路地区の人々と「80 になっても夢とロマンを」を掲げて、学生を介したコミュニティづくりを進めている。

【目的】

①田村市都路地区(岩井沢地区)の人賑わいづくりを創出する
- 福島大学学生の地域往来
- 都路地区外からの人の呼び込み
- 村づくりのための専門家の関与

②都路地区の方々との交流を深める
- 高齢者とともにした世代間交流

③都路地区の方々の主体的な暮らしへの一助
- 「80 になっても夢とロマンを」「いきがいづくり」

④都路地区をフィールドラーニングの拠点の一つに
- 学生にとってのフィールドラーニング
- 外部の人々にとってのフィールドラーニング(田村市のグリーンツーリズム)

⑤お世話いただく都路地区の方々に感謝する

【連携・協力】

・田村市復興応援隊
・一般社団法人ふくしま連携復興センター
・都路地区岩井沢の住民の方々

【活動場所】

田村市都路町岩井沢地区(畑と家を借用)

【内容】

・畑での作業、拠点とした民家の整備。住民との交流活動
・白菜、エゴマの植え付け、収穫
・都路ふれあいサロン
・秋の学生 DASH 村大感謝祭 2016　　11 月 13 日

【参加者の声】　　本郷う野（行政政策学類 1 年）

私が学生 DASH 村に参加した際は、丁度エゴマの脱穀を体験することができました。刈り取りがすでに終わり、十分に乾燥してカラカラになったエゴマの束はずっしりと重く、それを振り上げ丸太に打ち付けて実を採る作業は想像よりも大変でした。ですが、それにも増して、畑の周り一帯が本当に静かで、風が林の木々を揺らすサワサワという心地よい音だけが聞こえ、またその日は雲ひとつない青空が広がっていたこともあって凄く気持ちよく活動できたことも印象に残っています。

【活動写真】

⑦福島の風評被害軽減・産業振興サポート活動

7-1. 前橋芋煮会

【概要】

群馬県前橋市民の有志による団体「まえばし×ふくしま部」が主催する「前橋芋煮会 2016」に協力団体として参加した。活動の目的は、1.前橋市民同士、2.前橋市民と福島県民、福島県に縁のあるもの同士等、多彩な交流を図ること、3.福島の今を前橋市民に発信すること、4.交流によって福島に暮らす人々、福島を思いながらに避難し暮らす人々の生活復興に資すること、5.福島の現状をつたえ、福島の「元気」を発信すること、である。芋煮会の内容については投げ銭式による限定 300 食の福島風芋煮の振る舞い、福島県産の果物の販売(リンゴ、ナシ)、福島の物産販売などを行った。

【主催】

まえばし×ふくしま部

【活動日時】

11 月 3 日(木)

【活動場所】

群馬県前橋市

【参加者数】

6 名

【参加者の声】　　後藤　誠智(行政政策学類 3 年)

私は初めて前橋芋煮会の活動に参加しました。2012 年から始まり、5 年目を迎えるということで、今なお県外で福島を応援してくださっている方々と一緒に活動できたことに喜びを感じています。また、(学生団体)福島大学災害ボランティアセンターの OB の方々も駆けつけてくださり、当時のお話も伺うことができたので今後の活動へ一層精進していきたいと感じました。福島からの物販の方を担当させていただきましたが、通りがかる人々の中には立ち止まる人もいる一方で去っていく人々もいたので、立ち寄っていただけるように大きい声を出して、福島をアピールすることを心がけました。この活動の当初よりは規模も小さくなっているとのことですが、応援してくださる方々がいる限り、私も福島の地で様々な活動で貢献していこうとこの活動を通して考えさせられました。

【活動写真】

⑧福島の子どもたちの健全な交友づくりサポート

8-1. 第 4 回「集まれ！福島子ども大使」

【概要】

一昨々年から引き続き行われている活動であり、今年で 4 回目となった。震災から 5 年が経ち、ストレスを感じる環境の中にいる子どもがたくさんいる一方、震災に対しての風化は進んでいると感じている。そこで、福島の子どもたちの健全な交友づくりをサポートするとともに、全国の子どもたちとの交流を図りながら、福島を含めた全国の子どもたちに福島の現状・良さ・楽しさだけではなく、全国の子どもたちの出身地についても伝え合うことが狙いである。この「集まれ！福島子ども大使」を通して、参加した子どもたちが福島のことを自分の場所から全国へと発信する福島子ども大使となることを強く願って開催されている。

安全面を考慮してキャンプ地は会津地方とし、各活動場所の放射線量を事前に測定した。

また、この活動は、アサヒグループホールディングスと JTB 東北の方々にも協力をしていただいた産学共同プロジェクトである。

【活動期間】

8 月 7 日(日)～8 月 11 日(木)

【活動場所】

活動場所：会津若松市、裏磐梯一帯(北塩原村)

宿泊施設：裏磐梯ロイヤルホテル

【協力・共催】

・アサヒグループホールディングス(株)
・JTB 東北法人営業郡山支店
・裏磐梯ロイヤルホテル
・会津若松市内の観光施設
・大熊町松長近隣公園仮設住宅の皆さん

【活動人数】

<学生スタッフ>

福島大学 12 名、明治大学 2 名、関西大学 3 名、富山大学 2 名、鹿児島大学 2 名、岡山理科大学 1 名、岩手大学 1 名、ノースアジア大学 1 名

計　24 名

<参加者>

福島 19 名、北東北 4 名、関東 5 名、北陸 2 名、関西 2 名、四国 1 名、九州 2 名

計　35 名

【内容・行程】

●1 日目

移動

はじめましてのつどい

●2 日目

仮設住宅訪問(大熊町)

会津観光(飯森山散策、鶴ヶ城観光、民芸品作成、お買い物)

●3 日目

各班フリータイム

五色沼自然体験ハイク

桧原湖遊覧船観光

●4 日目

デイキャンプ(イワナのつかみ取り、手作りパスタづくり)

カヌー体験、ウォークラリー

さよならの集い

●5 日目

移動

【参加小学生の感想】

〈参加者からの作文より〉

・鹿児島/小 6 男子

福島子ども大使で一番面白かったのは、ウォークラリーやパスタ作りなどです。みんなで協力してミッションや、活動したりするのが楽しかったです。いろいろな県の有名なものや食べ物を聞けてとても充実した 5 日間でした。また、福島に行くことがあったら、福島に行きたいです。この 40 日の夏休みの中で最高の思い出ができました。ありがとうございました。

・須賀川/小 6 女子

この 5 日間楽しい事がたくさんありました。でも、そのほかにも福島の事をよく知れたと思います。1 つは、大しん災の大変さ。2 つは、福島の良いところなど福島の事がよく知れました。でも、福島だけではなく、ほかの県から来てくれた、友達や大学生の地元の良いところをいっぱい知れました。本当にありがとうございました。

・岡山/小 6 男子

ホテルについて部屋ごとに分かれて自己紹介をするときも緊張していたけど部屋の人といつの間にか話せて友達を超えて親友のようになっていました。すべてのことをやり終えて最後に皆で「RPG」を歌ったら涙が出そうでとても悲しかったです。でもまたいつかは、絶対に福島子ども大使に行きたいです。4 泊 5 日本当にありがとうございました。僕も大きくなったら、ボランティアに行って福島のことをいろんな人に教えてあげたいです。

【参加者の声】

〇深谷　怜(福島大学行政政策学類 3 年・プロジェクトリーダー)

今回でこの企画も 4 回目を迎えました。参加してくれた子供たちの中にはリピーターとして 3 回目の参加だというかたもいる程です。また、第一回目のこの企画から協力し続けてくれた大学生も今年は 4 年生として様々な面で企画をリードしてくれました。

今年の子ども大使はこれまでと拠点が変わりました。猪苗代から北塩原村に変更したことで例年と同じ作業だけではなく、今回の拠点に即したコンテンツ作りが求められました。具体的には学生企画のウォークラリーや班のメンバーの交流を促すデイキャンプの内容など例年にない発想で企画を組み立てていきました。また、今年度初の試みとして北東北（秋田県）からの子供たちも招待しました。

そのような中で始まった子ども大使当日。8 月の強い日差しの中全員で一つ一つの出来事を楽しみました。中には子供同士でけんかをしてしまい泣いてしまった子、ホームシックになり泣いてしまった子もいました。しかしこのような経験も踏まえながら子どもたちは友達の輪を全国へ広げていきました。

このふくしま子ども大使が参加してくれた人全てにとって最高の思い出に残ればいいなと思います。そして今後も福島について一人ひとりが大使として思い出を周りの人々に教えてあげてほしいなと思います。

〇菅野　和樹(鹿児島大学 2 年)

去年で大使のお手伝いをさせていただくのが、2 回目でした。去年の大使でも、子どもたちと一緒に福島を楽しむことができました。子どもたちも大学生も最初に顔を合わせたときはみんな緊張していたけど、最後のお別れのときにはみんなと別れるのが寂しかったです。典夫先生、大学生のみんなそして子供たち、5 日間本当に楽しかったです。ありがとうございました！

【活動写真】

⑨福島元気発信活動

9-1. 天満音楽祭

【概要】

天満音楽祭とは、大阪市の天満天神界隈で 2000 年より始まった音楽祭である。これが始まった背景には、アマチュアバンド時代が忘れられないという音楽好きの人たちが集まったということと、阪神淡路大震災後に「音作り・仲間づくり・街づくり」をコンセプトに、地元起業家たちが発案したことに由来する。

この天満音楽祭には、音楽を通じて福島への思いや情報発信、風化防止を目的に、関西大学橋ロゼミの学生と共に参加しており、今回で 4 回目の出演となる。

今年度は「学生 DASH 村」でお世話になっている田村市都路地区の皆さんの映像と共に歌声を披露した。

【活動場所】

関西テレビ扇町スクエア(大阪市北区)

【日時】

10 月 2 日(日)

【内容】

天満音楽祭でのステージ発表

【活動人数】

福島大学から 12 名

関西大学橋ロゼミ

【発表曲について】

今年は昨年発表した「想い」に加え、福島大災ボラメンバーの自作では 3 曲目となる「僕の住む街」を演奏することになった。

「僕の住む街」は、震災直後と変わらずに大変な面がある一方、福島のいいところ、作者が福島にいたいと思ったわけを率直に曲に表したものを発表することで、県外の方にも福島のことを知ってもらいたいという想い、「難しい問題を抱えている福島」ということだけではなく、普通に暮らしている人ももちろんいて、その幸せを人一倍かみしめていける素晴らしいところでもあるんだということも伝えたいという想い等、様々な感情が重なってできた曲を発表することに重きを置いていた。

【参加者の声】　　川村　真衣（経済経営学類 2 年）

私は大阪市内で行われる「天満音楽祭」に過去 2 年参加しました。福大から素人合唱団の参加ではありますが、福島の方の思いをメッセージや歌を通して関西の方々に伝えたいという気持ちを込めて参加しています。震災当時からは 6 年が経ち徐々に福島に関心を持つ人が減っています。なので、私たち福大生はこの天満音楽祭を通して、福島の現状や住民の方々の声を伝えられるこの機会を大切にこれからの参加していきたいです。

【活動写真】

⑩子供の発達・遊び支援・子どもの力支援

10-1. ふくしま子どもネイチャリングキャンプ 2016

【開催日時】

2016 年 8 月 17 日(水)～20 日(土)　3 泊 4 日

【開催場所】

小野川湖レイクショア野外活動センター

（〒969-2701　福島県耶麻郡北塩原村大字桧原字小野川湖畔）

【内容】

自然体験型キャンプ（詳細は行程を参照）

【協力】

ホールアース自然学校　福島校

【参加スタッフ】

・福島大学生　17 名

・福島大学行政政策学類教授　鈴木典夫

・ホールアース自然学校福島校　和田祐樹さん　杉澤莉子さん

（自然体験活動インストラクター）

・竹内なおこさん　（看護師）

【行程】

■8 月 17 日(水)

・結団式

・草木染

・ナイトハイク

■8 月 18 日(木)

・フリーアクティビティ

・カヌー

・料理対決

■8 月 19 日(金)

・トレッキング

・リバーウォーク

・自然素材で写真立てづくり

・キャンプファイヤー

■8 月 20 日(土)

・フリーアクティビティ

・解団式

【参加者の声】

○今泉　佑美（人間発達文化学類 3 年・キャンプリーダー）

「ふくしま子どもネイチャリングキャンプ 2016」で、キャンプリーダーを務めさせていただきました。このキャンプは、震災・原発事故以降なかなか外で遊べなかった中通り・浜通り在住の小学 3 年生～6 年生を対象とし、学生とともに裏磐梯の豊かな自然の中で 3 泊 4 日を過ごすというものです。

今回、私たちは「感謝」「達成感」「体感」を軸にプログラムを考えていきました。例えば、自分たちが住んでいる福島の食材、ごはんを作ってくれている人への感謝として、「郷土料理」を食事に取り入れたり、当たり前にあるものへの感謝として「玉ねぎの皮染め」「廃材で写真立て作り」。難しそうなことにも挑戦して自分の可能性を知ってほしい「滝つぼダイブ」。「ナイトハイク」を通して電灯のない森の暗さ、月の光の明るさ、虫や風の音を五感で感じてほしいなど、4 日間の企画 1 つ 1 つには学生スタッフの子どもたちへの想いが込められており、これまでにない新しいアイディアのあふれるプログラムとなりました。

キャンプでは、初日の親御さんに連れられて集合場所に来た不安そうな表情から、プログラムを通して子どもたちの表情はどんどん笑顔が増えていき、スタッフの想いが伝わっていることを実感しました。また、時折見せる真剣な表情に、子どもたちは遊びの中から様々なことを学んでいるのだと知ることができました。その変化を見守る学生スタッフの表情も徐々に柔らかくなっていて、最終日の集合写真の子どもたちと学生スタッフの笑顔が今回のキャンプのすべてを物語っていると思います。

このキャンプを通して、単なる学生スタッフと参加者の関係ではなく、強い絆というものを感じました。4 日間という短い時間の中でも、共に充実した中身の濃い活動に取り組むことで信頼関係を育むことができたのだと思います。解団式の際、「また来年参加したい」という声が多かったこと、キャンプリーダーとして何よりも大切にしたかった、子どもも大人も思いっきり楽しむ経験を、私を含め全員ができたことが何より嬉しいです。参加者全員の夏の思い出としてこれからも心に生き続けてほしいと思います。最後になりましたが、運営にご協力いただきましたホールアース自然学校の和田さん、杉澤さん、ご後援いただきました福島県教育委員会のみなさま、キャンプ中、子どもたちや学生を温かく見守ってくださった看護師の竹内さんに感謝申し上げます。

○小清水　梨乃(行政政策学類１年)

私はネイチャリングキャンプの途中から参加し,ほかのボランティアにも参加していなかったので知り合いも少ない状態でキャンプ当日を迎えたため、メンバーと仲良くやれるのか、最初は不安も多かったです。ですが、元気なみんなに引っ張られる形で私も楽しく活動させていただきました。最初は子供たちの性格や特徴がつかめないこともありましたが、4 日間過ごす中で相手もうちとけてくれたのか様々な面が見えてきました。元気な子供たちのおかげで私も楽しむことができたし、本来は私から子供たちの緊張をほぐすべきなのに子供たちから緊張をほぐしてもらいました。子供たちから知識を得ることや、当たり前だと思い疑問にすら思わなくなってしまっていたものなど子どもから教えてもらうことも多く

感心させられることも多かったです。子供たちがはじめてのことや日常では経験できないようなことに触れているのを見守るうちに「ここちょっと初日の彼とは違う」「この子はこんなに自分からも動けるんだ」と思えました。それは、単に最初は見えなかっただけだったり、みせてなかっただけの面かもしれませんが、そのような面を見れたことがうれしかったです。子供たちも大人数との共同生活、慣れないキャンプ場での生活で多少我慢した部分もあると思います。それでも、最後にまた来年も来たいといってもらえたことは本当にやってよかったと思いました。　.

子供たちがどんどんたくましくなるのは見ていてうれしくなったし、子どもたちと一緒に活動して子どものころに戻ったように何のためらいもなく遊べて楽しかったです。私の場合は子供たちに一緒に遊んでもらったという気がします。まさに大きい子供でした。もちろんすべてが大成功というわけではなく改良点もたくさんあり、そこは次につなげるべきだと思いますが、大小関係なく子供たちみんなにとって夏の良い思い出になったと思います。

〇大泉孝平　（経済経営学類１年）

ネイチャリングキャンプをひとことで表すとするなら、それは「成長」だと思います。福島の豊かな自然の中で親元を離れて 4 日間過ごすという経験は、望んですぐに得られるものではありません。キャンプ中、子供たちは笑ったり、怒ったり、時に悩んだりと本当にいろんな表情をしていました。自力で何とかする、仲間と協力する、そういった経験をたくさんした中で、何かが子どもたちの心に残ってくれたのならば、それだけでも私たちのネイチャリングキャンプは成功だったと言えるのではないでしょうか。

「成長」したのは子どもたちだけではありません。私たちスタッフ側も様々なことを学び、成長につながったキャンプでした。野外活動をするうえで必要な知識やスキルはもちろん、子どもたちとほとんど同じ目線でのものの考え方、チームワークやリーダーシップに引き出し方など、ひとくちにキャンプをするといっても、スタッフ側に求められることはたくさんあります。そのすべてに 100%対応することは、学生にとっては非常にハードルが高いです。だからこそ、人の子どもを預かることへの責任感や、危険が潜むキャンプを運営するうえで何に気を付けなければならないのかということを真剣に考えますし、それによって得られるものはたくさんありました。そして、どれほど入念に準備をしたとしても、いざキャンプが始まると悪天候やスケジュールの遅れなどによって予想外の変更を余儀なくされることが多々ありました。今年度のキャンプではその際の迅速な対応が課題となりましたが、限られた条件下での臨機応変な対応力なども時には必要になることを痛感させられ、今後に生かすことのできる良い教訓となりました。

キャンプを経験して学んだことをまじめに書いてしまいましたが、純粋にこの 4 日間は本気で楽しかったです。スタッフも「大きな子ども」として森の中をはしゃぎまわったり、ごはんを食べる量で競い合ったりと、大学生なら恥ずかしくてためらうようなことを思いっきりやりました。大変に思うこともありましたが、キャンプに参加したことで新たな出会

いとたくさんの楽しい思い出を作ることができ、私にとっては充実した活動になりました。最後になりますが、来年度はキャンプ長を任されることになったので、今年の反省を踏まえつつ自分らしさも出していけるような、今年度とはまた違ったキャンプを企画していきたいと思います。ありがとうございました。

【活動写真】

ナイトハイク

草木染

カヌー体験

リバーウォーク

⑩子供の発達・遊び支援・子どもの力支援

10-2. 福島の子どもたち日帰りリフレッシュプロジェクト

【概要】

福島県内には、まだ放射線への不安の思いを抱く家族もいる。そこで、そんな家族の小学生と米沢市へ出かけ、日帰りで思いっきり遊ばせるという支援を NPO 法人アースウォーカーズが主催している。災ボラは、様々な思いを持っている人々に対しても「振り子のニーズ」ととらえ、このプロジェクトに協力しサポートを行っている。

【主催】　NPO 法人アースウォーカーズ

【活動日時、活動内容】

第 1、2 回　5 月 28 日(土)、29 日(日)：田植え体験、公園遊び
第 3 回　7 月 3 日(日)：さくらんぼ狩り、流しそうめん
第 4 回　8 月 28 日(土)：枝豆収穫、公園遊び
第 5、6 回　10 月 2 日(日)：稲刈り体験、小野川温泉入浴
第 7 回　11 月 23 日(水)：大根収穫、ボルダリング
第 8 回　1 月 29 日(日)：そり滑り、スキー体験
第 9 回　2 月 12 日(日)：雪遊び

【参加者の声】　河野　早紀（人間発達文化学類 3 年）

私は米沢プロジェクトに参加して、大学生活ではほとんど体験できない子ども達との交流ができて充実した時間を過ごせました。

自分自身も子供たちと一緒に楽しむことができて、一緒に遊んだり、お話したりと、子どもたちと仲良くなるのに時間はかかりませんでした。最初は子どもとうまく話せるか不安でしたが、積極的に子ども達のほうから話しかけてくれて、嬉しかったです。
天候に恵まれない日もありましたが、プロジェクト自体は子どもたちの笑顔が耐えないものだったと思います。

子どもたちと一緒に活動することを通して、私は元気をもらいました。

【活動写真】

泥だらけになりながら一生懸命田植え体験

初めてのロッククライミング

寒さに負けず大根収穫

10-3. 浦和レッズハートフルサッカー教室

【概要】

サッカーJ リーグの浦和レッズでは、震災後から被災地の親子を対象にした 『ハートフルサッカー』を開催していたが、一昨年度、コープふくしまと福島大 災ボラが主催する形で福島県内でも開催されることとなった。今年度も昨年度 に引き続き、コープふくしま・

福島大災ボラ主催、浦和レッズ共催で行われた。 この活動では、福島の子どもたちにサッカーを通して、体を動かす楽しさを 体験してもらうほか、ハートフルとあるように心を育むことを目標としており、サッカーの楽しさとともにコミュニケーションの大切さを感じてもらう。 そのため、子どもたちだけでなく、保護者の方々も一緒に参加する形をとっている。ハートフルトークと題した講義では、ハートフルクラブの落合キャプテンがサッカーに限らず、スポーツを通して人としての土台づくり、思いやりといった話をしていただいた。

【活動日時】　2016 年 10 月 8 日(土)

【活動人数】　福島大災ボラ：13 名、コープふくしま：5 名、浦和レッズ：6 名

【活動内容】

・ハートフルサッカー教室、ハートフルトーク
・昼食(コープふくしまよりおにぎりなど提供)

【共催】

・コープふくしま
・浦和レッズハートフルサッカークラブ

【協力】

・福島商業高校サッカー部有志(サッカー教室運営補助として)

【参加者の声】　目黒　智和(行政政策学類 1 年)

今回初めて浦和レッズの「ハートフルサッカー」に参加しました。僕自身高校までサッカーをしていたので、とても楽しく活動できました。当日は天気が悪く、屋内で活動になりましたが子どもたちも元気にサッカーを楽しんでいてよかったです。災ボラの活動に初めて参加して、今後も復興について自分なりに考えたいです。

【活動写真】

⑫災害に関する他団体・企業との共同活動

12-1. 繋ぐ～KYOUTOUHOKU～（京都学生祭典）

【概要】

東日本大震災が発災した直後は、京都の学生もメディアを通して東北の現状や復旧・復興の様子を目にすることもあったが、時間が経過するとそれもほとんどなくなり、東北の現状について全く知らない学生も増えてきた。そこで、主に京都市内でオリジナル創作おどりである『京炎 そでふれ!』を披露している京都学生祭典の学生たちは「震災への理解を深め、京都の人たちに発信していきたい」という想いから、『繋ぐ~KYOTOHOKU~』というプロジェクトを立ち上げ、福島大学災害ボランティアが活動のコーディネートを担い、2013 年

5 月に初めて開催した。 2016 年４回目の開催となる今回は、『京炎 そでふれ!』の披露をしただけでなく、帰還困難区域に指定されていた浪江町などに現地に行き、住民の方に当時の町の状況を話して頂いき、被災地見学という形で今までにはない形で KYOUTOUHOKU の活動は行なわれた。例年福島大学での交流会も行われ、活発な意見交換が行われた。福島滞在最終日には四季の里で踊りの披露も行われ、活動に携わった災害ボランティアの学生のみならず仮設住宅に住んでいる住民の方も来ており、住民、学生の交流も行われた。

【協力】 京都学生祭典実行委員会

【活動日時】 5 月 3 日(火)、4 日(水)

【活動場所】 1 号車：笹谷東部応急仮設住宅、南矢野目応急仮設住宅
2 号車：松川第一仮設住宅、杉内多目的運動広場応急仮設住宅

【活動人数】 福島大学：19 名　京都学生祭典：82 名　計 101 名

【内容】 『京炎　そでふれ！』の演舞披露、住民との交流

【参加者の声】

〇箕田　きりん(人間発達文化学類１年)

ゴールデンウィークの連休中の 5 月 4 日、京都学生祭典　東北企画「繋ぐ～KYOTOHOKU～」の活動のお手伝いのボランティアをしました。南矢野目仮設住宅の方々に京都の学生の方々が京炎そでふれ！の踊りを披露するということで、会場設営や体験会のお手伝いなどの活動をしました。住民の方々に開始時間を案内する呼び込みをしたり、演舞終了後には住民の方々や京都の学生さんたちと交流をしたりしました。

あいにくの天気で雨がぱらつくなかでの踊り披露となりましたが、住民の方々もたくさん集まってくださいました。40 名ほどの学生による京炎そでふれ！は迫力があり、踊り手の皆さんの輝く笑顔が印象的でした。体験会ではうちわを自作したり、踊りの衣装を着る体験をしたりして、集会所は賑やかな雰囲気で満ちていました。体験会後の二度目の演舞の際には天気も晴れたためいっそう盛り上がりが増し、踊りの振り付けを簡略化したものを住民の方と一緒に踊って、笑顔が溢れる時間になりました。

私にとっては初めての災害ボランティア活動で戸惑いや不安も多い参加となりました。仮説住宅を訪れたことも初めての経験で、住民の方々とお話ししたり仮設住宅での生活の様子の一部を垣間見たりすることができて全てが新鮮でした。災ボラの先輩方や仮説住宅の方々はみなさん慣れた様子で触れ合っていて、この活動の温かい歴史を感じました。京都の学生の方々が東北に元気を届けてくれたことで、遠く離れたところにも復興を応援してくれている仲間がたくさんいることを実感することができました。今回の繋ぐ～

KYOTOHOKU～で繋がった仲間の輪とたくさんの笑顔は、私の大切な宝物になりました。来年の KYOTOHOKU や様々なボランティア活動に参加して、これからもっとたくさんの方々との繋がりをつくっていきたいと思いました。

○近藤　彰太（京都学生祭典実行委員会統括）

KYOTOHOKU は、東北の方々におどりを通じて、京都の学生たちの笑顔や元気を与えることを一番大切にするプロジェクトです。言葉にすると明快ですが、実際はとてつもなく複雑で、深く考えさせられます。初めて東北に行く人、去年も本プロジェクトに参加した人、東北出身の人そうでない人。その誰もが、必ず悩みます。東北の方々とどう接したらよいのか、深く東日本大震災について聞いていいのか。去年と同じ自分でよいのか、それがすでに東北の方々に対しての偏見ではないのか。

「自分たちに、できることは。」この問いを、プロジェクト参加者募集のときから一人ひとりが考え、実質 3 日間の現地での交流に全てを出し切ります。統括である私自身がたどり着いた答え。それは、東北の地で起きたことを忘れないこと。全部ひっくるめて東北の人々の「今」であり、そんな方々と出会えた「今」この瞬間を最高に楽しむために、私は全力でおどり、皆さんの心に寄り添い、楽しむ。いろいろ考え感じた結果、私が目指したものはすごくシンプルで、温かいものになりました。皆さんもこの気持ちを感じてくださったことを願います。

去年、今年と参加した私は、着実に前進しつつある東北を見てきました。避難区域の解除地域の広がり、町の復興、食品安全性の高さ、子どもたちの生活環境改善……。もちろん、未だ閉ざされた地域、帰ることをあきらめざるを得ない方々、悲しい部分もたくさんあります。その中でも、この大震災の記憶が跡形もなく消えていくこと、それが最も悲しいことだと私は教えられたような気がしています。仮設住宅の解体に伴う生活環境の変化、今までのつながりをさらに多くの人とのつながりへと拡大していく形態に対して、私たちのプロジェクトに果たしてゴールはあるのか。そもそもゴールを設けてよいのか。京都に生きる私たちの東北の方々との関わり方は、復興の喜ばしい現状の前に難しさを見せはじめています。

ですが、こうして私が、東北の皆さんと出会い一緒に過ごした時間は何にも代えがたいものです。私は悩みもしたけど、このプロジェクトの統括をやって本当に良かったです。ただ、次の世代へと変わっていく中で、同時に変わり行く東北の現状をしっかり把握した上で、しっかりとこのプロジェクトが目指す方向性を再度考え直すことが必要になるでしょう。プロジェクトの規模が大きくなる・小さくなるに関わらず、変わらないでいて欲しいのは、東北の方々を想う京都の学生たちがいることです。そして、私たちの活動である、京都学生祭典、ひいては京炎 そでふれ！という創作おどりが東北の方々にも浸透し、いつの日か、私たち京都の学生をきっかけに京都に足を運んでいただけることを心待ちにしております。

○畠山　幸一（現代教養コース 3 年）

昨年行われたKYOUTOUHOKUに続き２回目の参加になったが、一番強く感じたのは踊りを披露する仮設での住民の人数が減ってきているということである。近年復興公営住宅の建設に伴い仮設を出ていく方が増えているのが原因であると考えられる。そういった中でもKYOUTOUHOKUが行われたことには大きな意味があると感じる。去ったものだけを見るのではなく、仮設に残り住まわれている方のために精一杯踊りを披露する京都学生祭典の学生の姿はすごく輝いていたように思えた。そのおかげか住民の方々は終始笑顔であった。今回は踊りの披露や福島大学での交流のほかに、帰還困難区域に指定されていた浪江町など現地に実際に足を運び、現地に住んでいた方にガイドをしてもらった。請戸小学校に実際に行き、当時の話をしてくれた方の話に全員がしっかりと耳を傾け、メモを取るなどしていた。京都の学生に限らず、災害ボランティアの学生でも実際には現地を見たことが無い学生がほとんどだったのでお互いにとって有意義な時間が過ごせたのではないかと考えられる。今回京都学生祭典の統括を務めた近藤とは去年活動を共にしており、今回は互いにそれぞれのリーダーとして活動の指揮をとり、活動名でもあるように「繋ぐ」これが強く感じられるかつどうであった。来年度以降この活動が行われるかは現在定かではない。しかし、この踊りを楽しみにしている住民の方はいるので、どんな形になろうとも活動をぜひ続け、大切にしていきたいと感じた。

12-2. 森合・佐原炊き出し活動（配食）

【概要】

目に見える支援プロジェクト in 福島のみなさんが震災のあった年から行っている森合仮設住宅、佐原仮設住宅への炊き出し活動に、福島大学災害ボランティアセンターからも参加させていただいている。月に一度の活動で毎月メニューが変わり、例えばクリスマスの時期にはクリスマスにちなんだメニューを作っている。仮設に住むお母さん方もお手伝いに来てくださり、毎月楽しく活動を行っている。

【主催団体】　目に見える支援プロジェクト in 福島

【活動場所】　森合町応急仮設住宅

【活動日時・参加人数】

4 月 17 日(日) : 6 名
5 月 29 日(日) : 7 名
6 月 19 日(日) : 3 名
7 月 24 日(日) : 2 名
8 月 21 日(日) : 1 名
9 月 25 日(日) : 5 名※

10 月 16 日(日) : 5 名
11 月 27 日(日) : 4 名
12 月 18 日(日) : 7 名
1 月 22 日(日) : 3 名
3 月 12 日(日) : 2 名
※炊き出し活動ではなく佐原応急仮設住宅にて福幸祭

【活動内容】
森合仮設住宅、佐原仮設住宅への炊き出し・配食活動

【参加者の声】　　小針　彩乃(東北大学 1 年)
初めまして！東北大学 1 年の小針彩乃と申します。私は東北大学のボランティア団体に所属しているですが、福島市から大学に通っているということもあり、特別に福島大学災害ボランティアセンターさんに混ぜて頂いております。今回は森合・佐原仮設の炊き出しボランティアに参加しました。初めての参加ということでもちろん緊張していました。しかし、大人の方も住民の方も気さくで常に笑顔が絶えない調理場であり、それを見ているとみんなが炊き出しを楽しんでいて、生きがいにつながっているように感じることができました。また、仮設住宅が解散されるというお話を伺い、このような楽しみの場を提供して最後まで快く生活してほしいと思いました。

【活動写真】

⑰登録者のフォローアップ事業

17-1. ステップアップツアー2016

【概要】

自分たちが何のためにボランティアをしているのか。どうしてボランティア が必要なのか。ボランティアで交流する人たちはどういう経験をし、どういう思 いを持っているのか。こういったことを明確に分かる人は少なく、また、分から ないから活動に参加できずにいる人が多いという状況があった。また、福島県の中でも、現状や課題が複雑化している。

上記のような人たちがツアーに参加し、いわき市（津波被災地）、田村市都路地区（避難解除地域）、富岡町・浪江町（避難区域）の被害の状況を視察、震災を経験した方の生の声を聴くことで震災はまだ終わっていないということを実感し、震災を他人事ではなく同じ福島に住む自分たちのこととして捉えられるようになってほしい。そして、それをこれからの活動のモチベーションの向上と一人ひとりの活 動のステップアップにつなげてほしいという思いから本企画を行った。

【協力】

・田村市復興応援隊
・いわき地区ガイド　　菅野勇希様（いわき市豊間出身、災ボラ前 GM）
・浪江町ガイド　　升倉様（浪江町出身：南矢野目仮設住宅自治会長）

【活動日時】　2016 年 5 月 7 日(土)～8 日（日）

【内容】

1 日目　（**避難解除地域**）福島県田村市都路地区見学(学生 DASH 村、都路地区内)
　・都路住民の方と健康体操交流サロン
2 日目　（**津波被災地**）いわき市津波被災地見学
　・いわき市豊間地区、塩屋崎灯台、薄磯地区
（**避難区域**）原発避難区域見学
　・富岡町夜ノ森地区、浪江町請戸地区、浪江駅前

【活動人数】　災害ボランティアセンター新規登録者を中心とした福島大学生：19 名

【参加者の声】　川島　史奈(経済経営学類 1 年)

私は、以前から東日本大地震と福島第一原子力発電所事故によって、数えきれない被害を受けた福島の地で学ぶからには、何らかの形で現地の方々と触れ合ったり、学んだ

りしようと考えていました。福島大学災害ボランティアセンターの存在を知り、所属を決めました。しかし、私は県外出身であり、報道でしか被災地を知りませんでした。被災者の方々が実際どのような被害を受けたのか、学びたいと思い、ちょうど良い機会に頂いた話がステップアップツアーでした。
実際に参加してみると、一泊二日と短い日程の中に、盛りだくさんの内容でした。福島で津波の被害があったことすら知らなかった私にとって、いわき市豊間地区の灯台から見た風景は、驚きしかありませんでした。違和感がある、広々と続く殺風景な海岸。また、浪江町請戸地区の小学校。想像もできない被害の爪痕を残し、教科書も黒板も体育館も日常を過ごしていた風景が変わるということを肌で感じました。
　当時、放射能の影響でそこで定住することもできなかった富岡町の夜ノ森の桜の若葉を見にいきました。誰も住んでいない街。ひっそりと立ち入り禁止の塀の向こうに立つスーパーは、3 月 12 日の震災翌日のタイムセールを予告する看板が出されたままでした。時間が止まったようで、物音は一切せず、鳥の鳴き声だけが響いている目の前の世界に出す声もありませんでした。
ステップアップツアーで目に見て感じた風景は、今でも私の目に焼き付いています。ステップアップツアー参加した後、実際に訪れたところに住んでいた住民の方々と活動で関わる機会が沢山あります。被災者の方々が重い感じた全てを把握することはできませんが、是非ステップアップツアーを参加するのと、しないのでは、活動に対する姿勢や意識は、変わってくると思いました。また、先輩方や、同級生と関わり、沢山お話しする良い機会でした。

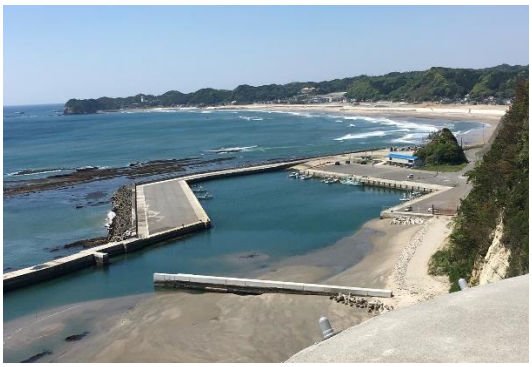
【活動写真】

《学生 DASH 村見学》

《住民の方との健康体操サロン》

《いわき市塩屋崎灯台》

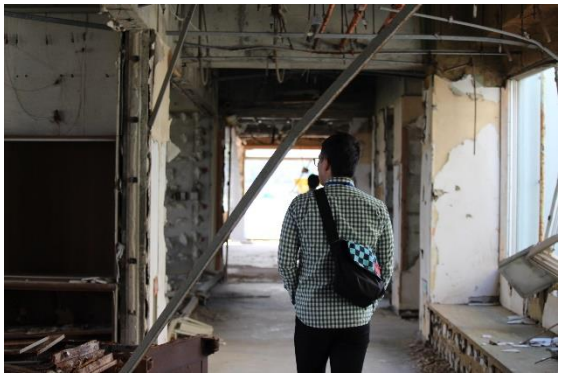
《かさ上げ工事が行われている地域》



《富岡町夜ノ森地区見学の様子》

《浪江町請戸地区見学の様子》

《津波被害を受けた請戸小学校》



《請戸地区》

《浪江駅前見学》

17-2. ボランティアウィーク 2016

【概要】

「Key's」、「スタ☆ふく」、「リプラボ」などの学生団体と連携してボランティアウィークとして活動することを通して、学生団体災害ボランティアセンターの活動紹介をしたり情報を発信し、多くの人に興味を持ってもらい、災ボラへの登録者や活動参加者を増やす。

【開催日時】

・準備期間：6 月 7 日(火)～7 月 11 日(月)
・開催期間：7 月 12 日(火)～7 月 15 日(金)

【開催場所】

福島大学 S 棟前広場(雨天時 S 棟 学生課前)

【内容】

① 仮設マップ
　災ボラが関わらせていただいている福島市、二本松市、本宮市を中心とする仮設住宅のマップを作成し展示。
② 活動紹介
　災ボラ発足時から現在までの活動の中で、春夏秋冬ごとにわけて活動を紹介して展示。
③ いるだけ支援特集
　2015 年から新たな取り組みとしてはじまった「いるだけ支援」について、概要の説明や仮設に住む学生、住民の方の声を掲載。
④ うちわ作成、配布
⑤ 今後の活動予定カレンダー
⑥ 熊本地震への募金活動
⑦ わたあめ、ポップコーン配布
⑧ フリーマーケット
⑨ 災ボラ登録、災ボラ保険新規加入手続き
⑩ 活動動画上映

【参加者の声】

・武田　若菜(行政政策学類 2 年)

毎年行われている「災ボラウィーク」とは異なり、今年から学内の団体さんと連携し規模を拡大して「ボランティアウィーク」として実施しました。

普段の私たちの活動や災ボラが関わらせていただいている仮設住宅の様子などを発信し、同時にボランティアを身近に、気軽に参加できるものであることを周知するいい企画とな

ったと感じています。特にフリーマーケットや熊本地震への義援金には多くの学生が足を運んでくれてうれしかったです。他団体との連携は難しいものでしたが、このボランティアウィークだけではなく、普段の活動でも連携していけたらと思います。来年も、今年以上に盛り上げた企画にしていけたらと思っています。

・相原　隆之介(学生ボランティア団体　Key‘s　代表)

今年のボランティアウィークでは他団体と連携して団体の紹介ができ、大学やボランティア活動全体の活性化を狙えるよい企画だったと感じています。

Key‘s として初参加ということで多くの協力者を募ることが難しかったですが、これからの企画では今年の経験も踏まえ、より実施や運営もしやすくなるのではないかと思います。ということで、来年もぜひみんなと実施したいです。

【活動写真】